

身延文庫藏和漢朗詠註抄影印並に翻刻

山
崎

誠

凡 例

- 一、この翻刻篇は、身延文庫蔵「和漢朗詠註抄」零冊一帖を、原本に基づいて翻刻したものである。
- 二、翻刻にあたり可能な限り原本に忠実になるよう努めたが、諸種の都合上、次の如き形態上の変更を加えた。
 - 1 漢字の異体字・略字の如きは通行正字体に改め、異体の仮名に就ても通行の字体に改めた。但し、「万」と「萬」、「仏」と「佛」の如きは原本のままとした。
 - 2 破損虫損のある箇所は、有効な残画によって解説可能な場合は（ ）に括弧して示す。解説不能のものは□を以て表わした。但し、□の個所の右傍に（ ）に括弧して字を充てたのは、文脈・引用原典によって推定したものである。
 - 3 誤写と認められる場合も、原字のまま翻字し、正しいと思われる字を（ ）に括弧して右傍に小書した。また当時の慣用と思われるものにはことさら手を加えていない。誤脱の場合も誤写の場合に准じて原文のまま翻字し、脱していると考えられる字を（ ）に括弧して右傍に小書した。
 - 4 行取りは原本の通りとし、翻字本文が一行に収まらない場合は、Ⅱ記号を行末に入れ次行に移る処置をした。
 - 5 割注は原本の通り割書のままとした。
 - 6 振り仮名・返点・合符・声点なども、全て忠実に、表示することに努めた。但し、声点の位置は正確を期するため、「香(上)」、「宿(入懸)」の如く表示した。
 - 7 踊字の符号「く」、「く」等は、原本通りのものを用いた。
 - 8 補入・見せ消ちなども、原本通りの体裁で示した。
 - 9 原本にままだ附された句読点は、それぞれ「・」「・」で示し、通説の便から私に附した読点は「、」で示すこととした。また原本中に屢々みられる、一、二字分を空けている箇所も、原本に従って適宜の空白を設けた。
 - 10 原本の改丁は、半丁毎に「ウ」の如く行頭に表示することとした。
 - 11 朱筆は、(朱)の如く示すこととした。
 - 12 翻刻本文に記すことの困難な差声や、特に問題のある箇所、欄眉の書入れ等は、*符号を付し、番号を振って、翻刻本文の末尾の翻字注に送った。

三、檢索の便宜のため、朗詠集本文のはじめに作品番号（伊藤寿一・鹿嶋正二『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切紙文』に付されたものを用う）を私に付した。

身延山久遠寺の宝蔵に「和漢朗詠註抄」の零冊一帖が蔵されている。ここに身延文庫の允許を得て、影印並に翻刻を行うに当り、聊か解題を叙す。

「和漢朗詠註抄」(以下に「註抄」と簡稱す)の伝本は、管見によれば次に掲げる四帖が伝世する。孰れも鎌倉時代書写に係るものながら、零冊である。残存部位を異にする四帖を弥縫するも、完帙に満たぬのは遺憾という他ない。

身延文庫蔵本(架蔵番号和漢経論俱舍部外三・一)は、大きさ縦廿二・二種、横十八種、樹型綴帖装一帖。料紙は厚手楮紙で墨界(界高十九・五種、界幅一・九種、毎葉八行)が施されている。一行の字数十八字前後。表紙は本文第十二葉表を写した反古紙に薄様を貼り合せたもので、本文と共紙。紙数は各折六紙の三折、墨付全て卅五葉で、第卅五葉以下を脱葉している。本文には墨仮名・返点・合符・声点が附されているが本文と同手。また欄眉二箇所の書入れも同筆と認められる。表紙に外題無く、見返し及び第二丁表に位牌型の身延文庫の墨印を捺す。見返しには、次の目録が記されている。

「夏二更衣コロカヒ二首夏三ウサヒ端午ウツヒ四納イルメシ 涼五「晚夏六花橋七郭公八螢九蟬十」扇ウサヒ十一夏節 秋十二立秋十三早秋十四七夕十五「秋興十六秋晚十七秋夜十八八月十五夜十九」月廿九月九日廿一菊廿二九月尽廿三「女郎花廿四萩廿五蘭廿六佞臣覆国文有興文集文

この目録より案ずるに、親本の段階で既に「夏夜」と「蓮」の標目を脱していたものと覚しい。次に改訂して本文第一丁初行に「和漢朗詠註抄上二」の内題がある。蓋し、本帖はもと秋部「蘭」までの本文を有していたと思われるが、現存は「秋興」の23楚思淼茫の句の注で途絶、以下を落丁している。本帖にはまた標目や朗詠本文の句頭、及び句読に稀れに殊が差されている。これを後人の所為と見做すほかに、補筆等は存しない。書写年代は書風紙様よりして鎌倉中期かと認められる。

東北大学附属図書館蔵本(別置阿一・三九)は、大きさ縦廿七・二種、横十七・七種の綴帖装一帖。料紙は厚手楮紙を用い、一面八行の押界(界高廿三・四種、界幅一・九種)あり。一行廿一字前後。表紙及び裏表紙は本文共紙であったと推されるが、原態を失って別の楮紙を以て補綴されている。紙数は六・六・六・六・七・八紙の六折、墨付全て七十六葉。後補の表紙に外題はなく、本文初行に初題「和漢朗詠註抄」が記されている。墨仮名・返点・合符・声点は孰れも本文と同筆(二

箇所欄眉に反切を注しているが、これも同手)。朗詠集の詩句齧頭に殊の庵点を点している。まゝ「後書」と称して行間余白に、朗詠集の和歌を別筆で補入する。この補入は室町期のもものと認められる。書風よりして本帖は鎌倉後期乃至は南北朝の初頭の書写かと推定される。

黒木典雄氏旧蔵小林正直氏御所蔵本は、『国書総目録』に「和漢朗詠註略抄」と掲出されているものである。毎日新聞社刊『重要文化財書跡篇Ⅳ』に「綴葉装二帖。各27.8×18.1cm。朗詠集の註書。註者未詳。鎌倉中期の書写にかかり、朗詠集の註本として注目される」と記されるのみで、その書誌を詳らかにしない。幸い、東北大学蔵の写真を検することを得たので、これに拠って窺い得る所を以下に記す。

この二帖は僚巻で、本文は押界毎葉八行に一行十九字前後で記され、墨仮名・返点・合符・声点が施されている。「和漢朗詠註略抄」の内題を有する帖は、墨付全て卅五葉である(以下甲本と称す)。他の一帖は内題「和漢朗詠註抄」で、墨付全六十葉であるが、二箇所(水の515、518、及び眺望の631、632)数葉を脱している(以下乙本と称す)。山田孝雄博士は東北大学蔵本とこの二帖を「三書同一筆にして鎌倉時代末頃の書写」(岩波文庫本『倭漢朗詠集』序説)と見做しておられるが、東北大学本とは別手の如く推定される。

以上の四帖は、各その残存部位を異にしている。東北大学本は巻首に桑門隱士無名の序、次に朗詠集の書名の釈義、春部冒頭の立春1より藤142までの注を有している。身延文庫本は既述の如く、東北大学本に続く夏145より秋興223までを、黒木氏旧蔵甲本は蘭麩289より仏名397まで、乙本は朗詠集下巻の酒前麩489より親王677までを有す。即ち、朗詠集上巻の224、288に相当する本文(身延文庫本巻末落丁部)を欠き、下巻は僅に三分の一489、677を存するに過ぎない。

黒木氏旧蔵甲乙本の二帖の初行は、各標目「蘭麩」或は「酒前麩」に始まる。これは書写の際巻首に欠損を蒙っているものと判断されたとも、或は事実残欠本を書写したとも解し得るが、寧ろ巻序が元来、これら標目の半ばで分たれていたものと推定される。それは身延文庫本の形態に自と示唆されている。

身延文庫本は「和漢朗詠註抄上二」の内題を有している。また既述の如く、目録に蘭の標目の存する所から、黒木氏旧蔵甲本の巻首「蘭哉」(蘭ののこり)に続く内容を有していたと想像される。

目録からは更に巻奥に文集を抄した「倭臣覆国」の一文を持っていたことが窺える。ところが、黒木氏旧蔵甲本の巻奥にも、次の如き附載記事が存するのである。

除夜

探桑老詠

桃顏春暮面置四海之波緑リヨクハツ 髮秋去首積三冬之雪チヌム 三十性方盛 四十氣力微 五十白毛髮 六十行不直 七十懸枝立 八十半魏々 九十得重病 百歳死無疑

日蝕事

羅喉計都等惡星詣日月之宮殿ニ時風黒ク 詣也其時日月共蝕給也、又云修羅帝釈トタ、カヒスル時修羅日月光ニニヨテ帝釈戰勝スレト 日月取ヲ スル時ニ利支天帝釈ニ後立日月立ス隱也、其時蝕也、又云大海中魚ト云穴アリ仍魚カシラヲ彼穴入其時ニ身延文庫本と黒木氏旧蔵甲本との、かような照応から案するに、「註抄」の原態は朗詠集上巻を三分したもので、東北大学本は「上一」、黒木氏旧蔵甲本は上三に相当すると推定される。下巻についても、三分冊されていた可能性は高く、黒木氏旧蔵乙本は「下二」に該当しよう。かくて、「註抄」の原態は六巻から成る注釈書であったと考えられる。

伝存する四帖は孰れも「註抄」の編者や成立時期を明らかにする奥書識語等を有しない。但し、東北大学本には、「桑門隱士無名」氏の序が存す。長文ながら、引用しておく。

原夫内外経書ニ日本皆從百済将来之一也。輕嶋豊日宮御宇ヲ菅田天皇代外書来之。磯嶋金判宮御宇ニ欽明天皇代内典来也。厥後学外之者ハ誹於仏法、読内之者ハ輕於外典。於斯集者内外共ニ擧顯其精要、玉石相混互不是非。従是以来于今、数代為朝野之甄ニ、往古長今哉。隱遁求出之輩猶為耳目之珍、志学白髮之頸專為遊心之基。其人妻々ト訓註蒸々。

就中國□不難明、愚蒙為易迷。爰無名或隨見引於本文、或隨聞集於人言、聊勒此註釈、竊授室中幼童。但雖引竹帛之文、尚迷草隸之書、雖載前賢之詞、更思出作之由。何況樂天作文集、未知五柳之裔、裴駰選集解、已暗瓊公之祖。彼博覽尚以爾。此短才將云何。嗚呼恥哉。稟性不敏、同於瓦礫、才甚不利、如於鉛刀。雖然不勝三玩好之至、謬記口伝之語。恐寒心貽懷、顏醜耳熱焉。庶觀拾文者、詳遺忘多矣。桑門隱士無名謹序。

序文の筆者「桑門隱士無名」は、即ち「註抄」の編者と目されるが、何人を比定す可きか手懸りに乏しい（繼徒の筆になること、前引「日餘事」が仏家の説であるなど傍証に事欠かぬ）。序文はまた成立について何一具体的な手懸りを持たない。唯、朗詠集を「從是以來于今、數代為朝野之翫」と云うのは、成立の時期を凡そ指すものとして注意せらる。

管見の限りでは、他の資料から「註抄」の成立や編者を明らかにすることも困難である。かくして、編者や成立については、「註抄」の内部にその手懸りを求める他はない。

「註抄」は、訓詁の方法として先行文献を博く涉獵している。引用書目は約百六十種（釈信救の「和漢朗詠集私註」の孫引を除く）に及ぶ。この中には佚書甚だ多く、採輯すれば古佚書の鴻宝となる。今は紙幅を惜んで、これら依拠典籍の調査から、本書の編者にかかわる問題二、三について記すに留める。

東北大学本の「春」の標目注に、「鏡水抄」を引用しているのは先ず注目される。

鏡水抄云、天四時亦有信。春以風為信、夏以暑為信、秋以涼為信、冬以寒為信。春无風、等天之失信也。文（4才）

この「鏡水抄」については、文永五年大律師訓海の著わした法隆寺藏尊英本「太子伝玉林抄」に佚文が引かれ、「要集」の異称を以て称せられたと知れる。更に興福寺藏「法相先德行伝」（書写年代は康和二年以降とされる）中に、「鏡水抄第一」が収められる。また、「南都往来」（黒板勝美藏本）に、「鏡水抄御書写之間、筆墨多召入候由、奉及候。仍、唐墨二挺、進上之候」の一文がある。以上の諸事実から、「鏡水抄」は南都法相宗に伝えられた相当浩瀚な仏書かと推される。「鏡水抄」を「註抄」が引証していることは、「註抄」そのものも法相宗に関わる僧侶の業と見做す有力な証拠と考えられる。

次に「註抄」の訓詁の方法として、韻書・音義・字書に拠って音義や訓を掲げている。小学書の積名・爾雅・蒼頡篇・千字文及び注・説文・玉篇・切韻・広切、悉曇関係では悉曇字記・元造曆(悉曇蔵)・音義(未詳)等がそれである。しかし、ここに注目す可きは、「註抄」の大半はこれら典拠を明示した引証でなく、古字書の本文をそのまま掲げているかと想われる点である。私見に拠れば、その古字書とは改編本系の「類聚名義抄」ではないかと考えられる。

嬭奴鳥反他鳥反々ハタムタハタムタハタムタハタムカハタムナハタムリハタム ヲハタムコハタムカハタムスハタム (身延文庫本23ウ)

嬭如鳥反々ハタムタハタムタハタムカハタムナハタムリハタム ヲハタムコハタムカハタムスハタム (高山寺本三寶類字集卷上59ウ)

嬭他鳥反又爾音々タハムタタハムカタハムナタハムリタハム ヲタハムコタハムカタハムスタハム (蓮成院本三寶類聚名義抄1の30)

「註抄」の成立時期は、恰も「類聚名義抄」の改編時期に当たっている。改編本「類聚名義抄」の一本蓮成院本は、他ならぬ興福寺大乘院家の塔頭の二つ蓮成院より出でたることは周知のところ。これも「註抄」の編者を法相宗の僧に擬する理由と
言う可きであろう。

加うるに、「註抄」は先行注の釈信救撰「和漢朗詠集私註」と密接な関係を有している。信救の学問的背景は依然不明の点が多いが、真福寺蔵「仏法伝来次第」に拠れば、勸学院に学んで、後に山階寺(興福寺)の学侶となったものと思われる。³⁾「私註」は「山階寺上乘院律師御詠」に依って草したとも伝える。また「三教指帰注」を検するに、信救は式家との学問的繋りを保っていたと考えられ、後述の如く「註抄」の編者の学問環境にも類似性を指摘し得る。身延文庫本に「救云」として引用している所から、或は信救と「註抄」の編者は殆ど同時代の興福寺の学侶ではあるまいかと想像を逞しくするものである。

朗詠集の註書としての「註抄」の価値は、院政末期より鎌倉初頭に存していた多くの注釈を引用している点にある。匡房の「江談」や信救の「私註」の如く、今日に伝存するものもあるが、大半は「註抄」以外に所見のないものである。

敦隆説・敦光説・茂明入道説・内郡入道説・広注・仮(名)字注・口伝抄・弘決・勸物・無名注・或(有)注

このうち、敦光・茂明という式家の特定学者の説の引かれているのは注目せられる。この時期、博士家に於て朗詠集に於いての家説が形成されていたとみられるのにも拘らず、菅家や南家の学者の説が皆無なのは不審とするに足りよう。式家の学者の説を引くことは、或は「註抄」が式家の出身者の手に成ったことを物語るのであらうか。この点に関して、「註抄」に明衡撰の「本朝文粹」を長文引用することや、「有消息」として身延文庫本に「明衡往来」の一節を引用していることなどが甚だ注目せられるのである。

有消息云、葉玉一フスツク一流作リウサク以百草之花ニ貫ツ以五色縷ニ摸シテ草虫形ノ栖ス其花房ニ云々(6オ)

今朝自ニ或所ノ給ニ葉玉一ニ旒ニ作以百草之花ニ貫以五色之縷ニ摸ニ草虫形ニ栖ニ其花房ニ芳艷之美有レ興有レ感(類従本雲州消息上本)

もとより臆測の域を出るものではないが、以上述べ来った点を以て、「註抄」を凡そ、院政末期より鎌倉初期にかけて、式家ゆかりの法相宗(興福寺)の学侶によって編まれたものと考ええる。

国語史の研究資料としての身延文庫本の価値について、詳述は省くが、一、二注目すべき事象を拾ってみよう。その第一は、声点の附された和訓があることである。全て廿三例を算する。

衣フ帯オヒタリ 隔ヘタテタル 年シツ香カ一カ上カ (1オ4行)

当マサニ招テ三イフ邑ヲ入カ懸カ老ヲ一カ上カ 醋タケナハナル上カ (1ウ5行)

不アラスレ是レ蟬ノ悲ノ客ノ入カ懸カ意カ悲カ (25オ3行)

この例の如く、胡麻点、圈点の兩種がある。一般に漢籍における声点附の和訓は、正統的な根拠ある訓、従って師説の如き訓が、典拠ある訓として伝存され、それを明示する機能があると説かれる。例示した差声のある和訓は、特別典拠のある訓

とは認め難い。

不^ニ是^シ蟬^ニ悲^シ客^ノ意^ノ悲^シ (東北大学蔵享祿二年写江家本)

不^ア是^ス蟬^ハ悲^シ客^ノ意^ノ悲^シ (岩瀬文庫蔵延慶二年写南家本)

不^ア是^ス蟬^ハ悲^シ客^ノ意^ノ悲^シ (専修大学蔵建長三年写菅家本)

このことから考えて、差声は式家固有の訓を伝えるものかとも推定される。猶、朗詠集の本文ということで、別の意図を以て差されているものかも知れない。

第二に、一音節字音の長音化の例を拾うことが出来る。孰れもイ段音の場合の用例である。

青^キ平^キ懸^キ苔^キ平^キ地^キ上^キ (8オ1行)

行^{ユク}吟^{キム}平^ス濁^ス古^シ平^シ集^シ入^シ納^シ涼^シ平^シ詩^シ平^シ懸^シ (10ウ2行)

楚^チ思^シ上^{ヘリ}濁^ハ平^ハ濁^ハ (35ウ5行)

字音の長音化は、漢字二字から成る熟字の下位字、又は一漢字かのうち、しかも子音が無声の場合に生じるとされる。「詩」は止撰之韻で歯音清字、「思」も同じく志韻で歯音清字であるから、この条件に適う。しかしながら、「地」は至韻舌音濁字であって、本来長音化しないものである。従って、

雨^{メウ}潤^ル新^シ平^シ懸^シ秋^キ平^シ地^キ上^キ (29オ3行)

の場合には、長音化していないものと認められよう。蓋し、「地」の長音化は発音上(朗詠であるから)落着きが悪く、また聴覚上も響きが悪く聞き取り難いため、これを長音化したものと解釈される。

以上の如く、漢文訓読語史の研究資料として、身延文庫本の訓法が有益な材料を提供すること少くないと考えるが、今後

の研究の深化を期しつつ、ひとまず解題の筆を洗う。

猶、「註抄」の和漢朗詠注釈史上に於ける意義については、別稿「和漢朗詠註抄攷」（『国語と国文学』第五十九卷第三号）に鄙見を述べた。併読くだされんことを乞う。

注

- (1) 太田晶二郎『山田忠雄氏蔵 法相先德行伝』解題（貴重古典籍刊行会叢書所収）二頁。
 - (2) 尾崎知光『筑国守国
神社蔵本三宝類聚名義抄』（未刊国文資料別巻二）所収「連成院本類聚名義抄新考」一四四頁。
 - (3) 黒板勝美『真福寺善本目録』四五頁。
 - (4) 小林芳規『平安鎌倉時
代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』所収「漢籍における声点附和訓の性格」五五二頁。
 - (5) 小林芳規「漢書楊雄伝天曆二年点における一音節字音の長音化について」（土井先生頌寿記念論文集刊行会編『国語史への道 上』所収）四三頁。
- 〔附記〕 貴重な典籍の影印並に翻印に関し、御清諾を賜った身延文庫林是晋先生に深甚の謝意を表す。東北大学蔵本の調査にあたっては菊田茂男先生の御芳情を忝くした。また太田晶二郎先生には有益な御指教を賜った。末尾ながら、本稿掲載のことを徳澤戴き、さまざま啓沃を賜った小林芳規先生はじめ、鎌倉時代語研究会の会員諸氏に厚く御礼申し上げます。

表紙



身延文庫藏和漢朗詠註抄（影印）

春燈殘至干夏古衣今始將着也三月廿日
 春也四月一日夏也故經宿春燈殘光至手夏
 色更衣三時開箱取出近曾生物本香木味
 于今有也昔壁者昔我同壁也文集六十

夏月合曰至夏日蟪蛄鳴不鳴涼水
 溼浸也玉帶三夏次春之時也

和漢閉詠註抄上二

夏一更衣二首夏三 瑞手四 總京五
 晚夏六 施橋七 郭公八 螢九 蟬十
 扇十一 秋十二 早秋十三 七夕十四
 秋興十五 秋晚十六 秋夜十七 八月十五十八
 月十九 菊二十 九月盡二十一 菊二十二
 女喜二十三 秋二十四 蘭二十五 任臣復國文二十六

七三窓明簾卷透朝光臥整巾簪起下床
背壁一身香無情亦任他春香不醉爭銷得只

長一部清高一壺酒與君明日煖新堂煖梅

生衣欲待家人看宿願宿願加邑先解宿願

惜春纔向上句更衣待人看也下句酒也

長衣亦可飲也 生衣也 家人也 宿願

故酒也 且差人也 長光 明吉胡日切然酒不醉多子

有有醉少亦不成 多子亦多有云一木

正色之念也燕部宿改宛仁也三月三

度拾遺老會飲於寸管樹下 論語善鄉

人飲酒杖者出期出矣注孔丘國曰魯光

人也鄉人飲酒之礼王葵老之礼畢孔子從

而出也

首夏

產頸作采經春晚階 高敬又夏開

麋麋鹿也竹竹酒名百詠百詠且城

出竹茶酒有言昔秦世有牧士取竹葉釀

馬其馬多食竹葉醉故取醉本言竹也

彼馬醉死後從畢竹生於其取之為馬乘是

蓋也依少兒言五自歲也君子祝此然竹馬

遊於事也松島來見本說可守之有言昔後

惡外子与廉也食外子不食之三誇木堅直三

前置成越後置物或置漸成酒為不齊

木折竹支指三故言竹葉也世間酒家指

三股木生故也百法部九木并三事有

文集十七云舊故被正開春酒初斲因樹劉十九

張天雀廿四飲龐頭八夏開似火漆深江膝架

如餽氣未綠和室試將詩思相招儷有風

情或可來明日自地應更好期同野將盡

蒼生石面輕衣短何出也心畫疎百部作興

輕衣者生衣也言昔苦似衣何衣必化盡云也

言皆悟之冬裡不寒又言從復得生一寸此語
 枕杵子昌稱眾服昌稱十三身生毛月視靈
 破云端午昌稱午制也故南端昌稱也
 有三昆明也南岸端石上生昌稱板長生樂建
 片日晨行此日万事可滿長日故用此日縱我
 也五月當午月也月令云五月建午之月也
 日本可有五日也午者五也故五月五日云端午
 極五月初午日當第五日端午言也五月初

端始也後漢言汨羅為筆友去息也班也亦流急也
 某綴銀以五色絲卷入水茶屈午觀字記端午者
 水而來故五月五日端午楚國人每避此日以禱
 號云楚人屈午五月五日當初午之日浴濯
 風土記云仲夏端午注自端始也謂五月五日也

端午

三月在軒
 之六ノ早子ニヒビクヤニナリ
 其三

一名長命綵一名蠻命綵一名辟兵綵 帝曠也
 乃撰思鬼令人不溫病俗謂五色絲為百索
 車花房風俗通五月五日五色絲繫臂
 流作以百草之流貫以五色之絲摸草虫形
 戲其入五月五日藥玉 有消息云藥玉
 事也夏夏毒整人事有昌補懸袖衣後不
 也有云五月五日昌補加艾瘻骨屋事為除
 五日以端午逢作人形立門當其風乃禳除

云採艾入懸門戶止穢除毒氣也江表云五月
 日三門鬼神見之作畏不敢崇也荆楚歲時記
 人者台蓬也似人形事有也是謂艾人也五月五
公無難也艾艾人避及艾艾及有時五月五日也艾
 日朝當艾人路人無病也任躬行者荆楚歲時記
 上句五月五日艾人三門燈亮也下句五月五
 有時當戶艾人身三無意故因任躬行賦艾人
 已上此藥尤喜矣然云石昌補也

龍靈亂國之時以事餘之幣帛祭之
 制伏靜之此亦可然由此先作降伏地中有靈
 也况云毒地首赤身青背有錢文採做草
 切之浮酒飲之即昌菴是也依之除其毒聚
 是制伏相也俗人昌菴名穿也先切根法酒飲
 醜醜首結表降伏相也秘昌菴名穿也差尊
 事日本語也不被得心右入堀河院匡房
 奉昌菴解文云進上右奉昌菴于壬午五月五

曰歲久病及苦先生有五月從如方藥邪
 國毒風吹某君有人民中其風者眾病發起而
 五月五日採艾作人形者五線衣三門戶外
 毒其身代也有言毒風來者從彼而方無
 意鬼來為奪一切眾生精氣也而見其入三
 門作畏不入其門有言高辛氏有八子
 子其中一人海死矣五月五日也則成毒地矣國
 作崇國玉集賢臣問操突計有臣申黃靈時

日大江為天皇年殿上人皆不能讀之仍屋
金華間三讀

又文年上昌蒲也其根似地故地之平水也
或謠言宗則入五月五日昌蒲冠之行道見
女人美夫亦于心中思死死昌蒲之
宗則共之千二成之行之日昌蒲之文

一也地之平水故也

綉涼 有云平水之上事也極勢之時解帶綉
風所也俗遊戲謂之綉涼亂成儀也

青苔地上銷殘綠樹陰前逐晚涼
三伏燠熱時消涼其物作也皆上雨之有
青苔不見雨氣色也次句夏暮春方寸未影
涼也

露華清望迎秋涼風聲未聞灑花秋涼

池上秋憶 簾幕者竹意也秋涼成意也次句香細
風吹入非秋之地也 露華 灑涼 簾幕者竹意也

有三唐上朝別入雙月編青竹為簾幕秋涼間

招涼竹性涼故為招涼故用之也是可然人所

為也非凡人事文選云珠簾清風空室與

涼颺消涼也風雜文選云建策王登閣臺

之宮宋玉景差侍有風颺然至乃披襟當披

袂此風寡人甚入其吹甚灑灑涼事有云隨

風動吾念也些上甚清

不其禪房無熱到但能心靜即身涼

夏暑有禪房而僧心消身涼也文集十五

苦熱類人之避暑走如猛獨有禪僧不出房

不足禪房無熱身涼上

班婕妤班婕妤團雪之羽代岸鳳生長心燕照王指

涼之珠當明月自得避暑對水石岸

團雪之羽何為避暑居水邊也招涼之玉無盡

月明夜甚涼也字甚婕妤者婦人室也有云

班婕姓婕者有賦也班名婕妤者官也國三寵愛

之夏極熱之時作扇賜之其扇國而自故團雪

人國寶謂招涼珠也。晝都炎氣夜照十二事。建王
 曰朕以之不為寶。吾國有數十中人皆有之。不可
 為奇物。所以國寶者。故人。歷古今賢者。明凡事。
 此則國寶矣。燕王大駭。不云矣。有燕照王行角。
 海邊夜火滅。不知道路。海神責其。將一明珠來。
 獻王。其珠照四方。各廿六。是珠當日光出水。
 是謂招涼珠也。內傳云。摩屋珠暗中得。明燈得。
 涼寒略得溫。岸者水岸也。砂者砂石。言風感。

三扇也。文選云。婕妤漢武帝妃也。姓班。箴作
 國。寶扇詩云。新製齊紈。素皎潔。如霜雪。其。翫
 徹扇團。額明月。出。君揮袖。動搖。風發。恒
 愆。秋。節。至。涼。隱。集。於。勢。日本扇名。蝙蝠。漢書
白。蝙蝠。有。言。日本。國。扇。名。蝙蝠。事。天。智。天皇。時。始。
 蝙蝠來扇燈。天皇御覽之始。作扇故也。
 燕照王有方寸玉照。車前後各十二車也。燕王對
 楚王問曰。貴國何寶。楚王曰。朕國無寶。照王曰。寶

則忘願。砂月照則松京珠得也。
 臥兒新高臨水障行吟石集緜源詩。
 障者障子也。言障子畫水石之繪也。古集緜源。
 詩者文集有緜源詩是也。
 池冷。水無三伏。夏松高風有一聲秋。炎明
 三伏者階陽書云。從夏至已後。第三度為初伏。第一度為中伏。立秋。初度為後伏。謂之三伏。
 曹植曰。謂之三句。於河原院長秀聖人房。詠夏。
 問。適詩也。居池邊不覺三伏。夏也。次句風吹松梢。夏中有秋氣也。此詩又時直字。水冷池風高松。匡房說也。有云伏者。數事也。三伏。三時也。中。銅鼓事有也。秘言伏者。以言事。性說未聞。三但見余雅釋名。金夏日。伏殿也。金雅釋名云。伏者。金氣伏藏之日也。金與火。故三伏。釋名云。伏者。金氣伏藏之日也。金與火。故三伏。在庚日也。庚火也。庚火也。言事不審。五行亂。當之時。庚金也。而何。今云。庚者。字誤。誤可。金也。

花橋ハナハシ 司馬相如上林賦云
 盧橋ルウキョウ 夏勢ハタチ
 盧橋子位山雨重倚欄素戔水風涼白
 湖寺秋興詩 盧橋者花橋也水風者湖亭意
 上句花橋得雨甚重也次句聞梧桐須
 乃木也此木常有風故云葉涼也
 枝繁ハナハシ 金鈴カネスズ 春雨ハルアメ 後夜ノチノヨ 薰風カウフウ 紫屑ムラサキノチリ 颯風ハタチ 程ハカリ 後ノチ 王ノミ
 篇詩其子丸而黃似金鈴其花方故曰薰風紫屑文

晚夏

竹筴タケササ 合備カヒビ 夏水ナツミヅ 檻カギ 風涼カゼスズシ 木待秋キノマテアキ
 白
 夏日遊水亭 竹亭タケノテラ 水檻ミヅカギ 竹中タケノナカ 建夏タケノナカ
 今也イマ 為水亭ミヅノテラ 晚ノチ 葉ハ 花ハナ 秋アキ 冷ヒヤシ 色イロ
 子事コノコト 神物カミモノ 申ウケテ 懸ツル 子コノ 也ナリ アラア 神カミ
 了タマシ 事コト 也ナリ アラア 神カミ
 交マヒ 王ミコ 廳ノミ 年トシ 內ウチ 死シ 物モノ 札シテ 書カキテ 入イテ 之ノ 名ナ 号ナヒ
 手札也テノシ 六月ムツキ 晦日ノシ 之ノ 名ナ 号ナヒ

時華子香物食被仰之以田當問守復

者遊行諸國求之而其方不知求行之間當也

之國到着花橋求得異袖持來也其間十九年

也由此花橋昔事始也常世國

袖庶也中傳日本託云垂仁天皇三年

新羅王子貢物九種之中在香菓謂香橋

又同即位七年天皇遣但馬毛理於帝也

國來香漢而使不遣之間庚午天皇卅一即位

治九十九年

天皇崩景行天皇即位辛未減自帝世國遣

即捧大母子弟九種香菓獻垂仁天皇三孫

歸造曰汝命度水往來三間經十餘四年御

字三時觀承宣命向旻後基雖經卷間無靈宣

之音巨獨生何益則矣自死啓為其造基於後明

風竹卷葉蕭條綠水暮殘花染吳紅白

河向連葉風被吹去也畫條漸秋以連沈

字一省草木表息也毛詩注云何棟谷也說云

夜泉生水夜泉生水 某文說文云藕華之發者也水泉生水
 也辭寶者 兼白也
 老展翻當翻月花開香散入簾風
 照下蓮詩 蓮葉風被吹當階若高欄篔簹子翻
 夜月見也 次句蓮花香入簾風句也
 砌簾雨字作階意也 文集十云階下某展
 風不如種在池上猶勝生於野水中
 澹開翠扇南風曉水涼紅衣早路秋許
 上句曉見池蓮葉似開青扇也次句蓮花亦
 浮水色教紅衣見也翠扇蓮葉似清風
 此竹條任應為何邊河未動是白蓮蓮花
 百詠迷詩云 吳遊見綠池
 綠竹更覓吳山曲便是吾君座下華自的
 宛平法皇五十賀行給子回賀書天皇美哉
 欲覽御屏風盡吳山千葉蓮花下張作也

夜泉生水夜泉生水 某文說文云藕華之發者也水泉生水
 也辭寶者 兼白也
 老展翻當翻月花開香散入簾風
 照下蓮詩 蓮葉風被吹當階若高欄篔簹子翻
 夜月見也 次句蓮花香入簾風句也
 砌簾雨字作階意也 文集十云階下某展
 風不如種在池上猶勝生於野水中

宛平法皇又中幸于宛法皇幸也

者彼山曲谷池生于菴蓮花不求彼山公望

日花勝彼言也此詩坤元錄御屏風三詩也帝王

御屏風有多名所謂漢書御屏風也

坤元錄一變天高一也此等御屏風墮時

被三之春見壞來日記文吳山上有池生午

菴蓮花服之長生不死也法苑傳流冰大臣看

罪王言得青蓮花可免之吳山有池中有青蓮花

又有梅檀大龍議而難近大臣請吳山羅漢

即云若人稱南無佛龍神不害大且從其言往

吳山稱南無佛龍知佛子敬之遂採蓮花獻

王免罪也賀慶也國王過冊九厄至五十年諸國

大神獻寶物于我前令舞祝舞御賀也從

十以後十年一度行賀給也過冊九厄極安賀云

事也後得賀生中三度行之四十賀五十賀

十賀

花經凡六万九千五百五言證無生忍道不二門位不
 思議解脫莫極於維摩詰經凡二千九十三攝
 四生九類入無餘涅槃曾無得度者莫先於金剛
 般若波羅蜜經凡五千二百八十七言壞過集福淨
 一切四道莫急於佛頂尊勝陀羅尼經凡三千二
 十三應念唵願生極樂土莫異於阿彌陀經凡千八
 百三言用正見觀直相莫出於觀普賢菩薩行法華經
 千七百六十五言證自性證本原莫深於楞伽波羅

為題(佛為眼知)法花中極善(卷意)
 妙法蓮化經一部八卷後秦鳩摩羅什三藏譯
 龍樹菩薩何稱陀十二礼言兩目淨者青蓮花吐
 詩者慈心奇聖人於侍從也蓮華高曰法苑
 經依養顧文之次為總作詩也發句奇藥集
 池蓮正蓮支人間草不須論文集云檳州重玄
 奇法苑院石壁經碑文註夫開示悟入諸佛智
 以了義度無邊以圓教立無窮莫尊於妙法蓮

其賈郭公者隱居於介和道云云之事也
 當年負負年云標上之故可岐也
 後類說也 江談云王弼弼談云郭者非真也
 當个先小童云此故也 一談云子鳥云
 鳴故 一談四年云云義 于山云云
 說一談田作鳥也其故速田作田時不可談
 上郭國之云談可守之內郡入道云郭公有多
 食先教會也如明公故云郭公也 秘云此談遂

此中會始有之其彼鳥早田期過時不就也鳴故
 貨禮司保 司殺 司殺 司殺 司殺 司殺 司殺 司殺
 有鳥鳴又曰郭公明公事也明王政有八種食
 郭公 郭國列喪所憶哀法而
 為思名仍為名焉又

秘藏本並失
 郭公十二萬六千八百五十七言三乘之要指萬佛三
 老波羅蜜多心經凡二百五十八言是八種經具上
 經凡三千一百五言靈法塵供佛餐了過衣般

也故司秋星言也亦非云辰謂房心尾也
 有五辰星者謂西星也以五星配五方事有其星
 星當西星也 秘云此義思天辰言介此尤善矣
 有三辰星者四季之中月出星也所以春二月
 夏五月 秋八月 冬十一月 出故言早汲也
 即春東方出夏南方出秋西方出冬北方出
 星也故秋西方出早汲也 秘云辰星星汲言
 月辰星有汲言星至也其星居天宮西云處

此火也秋二逆辰星早汲復初
 上句望夏過秋逆成飛敬共亦成也下句辰
 星早汲者古來難義也才未注之但見漢
 書王莽傳 板言四仲月出之星也今過五月
 當六月故言秋已逆等也 有三長庚也此大日
 星也 上句 有三辰星者天辰 亦星也謂計八
 宿之中房心尾三星也西方七宿之中三星也
 秋成早入星也人極 秘之故為難義也西秋方

世高故兒之盤高故見之經小故於失之持雖
 見至秋素天呈白而小昧於素天因不見
 也其故早沒也雖不能載於筆里呈為備瘡
 忘年憚書付之尤可秘之有尊皇善
 七皇頭四星之中居彼細皇也熒火月會
 六月中氣日腐草為螢若不為國臣有亂
 孝德天皇大化年中念食未女下而天皇崩路
 後彼女秦惠天皇生被築籠後付廿成

藤原邊沁有之孫云垂仁以前藤原上下諸人
 不殘留築籠陵中其陵口塞而第十一
 代帝垂仁天皇三時築河內國古市陵埋入
 事休有智臣奏達被留之畢申此彼大臣願
 禁中人土人形作代之埋入帝王感之賜聖離
 姓北野天神先祖也河內國土師寺土師大
 臣建三也後賜官原姓之
 長水暗蓋知夜楊柳屋同鳳表等事

漢書云江泌子士情勤黜人也家負無油清
 夜月光讀書縫日無且止時明月之夜對
 月見書月漸傾光登屋上江泌追光而拜
 屋上隨光進之從屋上落都其脚也後皇后
 史丈夫俗月夜見書為已是故也 路子
 蘇軾云孫康家貧冬月無油燭床坐讀書

至會書繁生所暗不知晝夜而安 知故燈入
 也 汝句秋風吹時馬送秋來也 收注鴈者
 胡國馬也秋來南翔胡塞多榆柳
 明仍在誰追月光於屋上始之不消豈積
 所產床頭紅紗照琉璃
 為皓誰為黜子文集自雪於梁頭也明皓
 燈大明誰為見書追月光於屋上意次丹
 白句也 故言燈火映徹涼也 漢託事車負者漢

唐書曰驪山宮天子避暑地也。百詠洋出
齊山有玉塔驪山雖無玉塔讚帝宮取命

風山蟬鳴之宮樹紅白樂府驪山宮文也
避之步春日玉輦暖步溫泉溢蜀之步秋

蟬

漢博士任空司徒

興油拾故入劉集以其先讀書縫日馬後為
文也家來注云車微字武子河米人也家翁

岫山門岫也此詩車微集強讀書事卷本

後麗足縫而良岫者初學字託云山穴白

太華字名虛廣川人也奉海賦其文甚

書海讀之因而發詠也海賦篇稱文章主云

經注云山海經者所託衆山百川草木禽獸之

夏尚所製之三書也文選云翰潔明讀山海

秋盛賦詩性書悒也山經者山海經也

山經卷裏疑過此海賦篇中似宿流司池

也温泉者初學字託驢山陽魯自秦始皇
 神女遊以作其日神遊之則生瘡始皇博
 神女為出温泉而洗除後人因差驗組金烏
 者不可謂實温也作玉貌暖付文章之心可謂
 依暖日似温長安西去不遠有山名驢山故有
 宮名驢宮也唐太原五年王在位五歲一度不
 行般宮其故為三日行章嶺中人百家財產
 故此也 遊之 嬾為及地也

千峯鳥路合梅雨五月蟬聲送美秋李嘉祐作
李端鳥路者聖名也初學字託梅就而雨
 日梅雨江泉字為善梅雨月今日可較各賞初
 生為春其就為秋故表以靈受為秋有處云
 六月莊麥熟而始有云表秋者四月秋見習
 託十門年論言夫二儀靈載四序生以夏景
 表靈龍表以三惟悻秋風溽暖靈巖桂以三弄
 奇日在未可便動幸榮懼冬霜涼李嘉祐

物名搖浴假名注云下句夏秋者四月名也
百穀皆生時春其說時秋也故夏四月秋

也月令見言五月宜鳴蟬秋送過也

鳥下錄無秦聖殿蟬鳴黃宗漢宮秋引漢賦

宮遊字繁鳥不驚也次句蟬鳴林中漢

宮表也秋寒也也無者共也連章多生燕

無道也秦始皇園聖事云余也秦園二林園

也秦始皇後園也劫鬼神築城事三里也

其月秦園也漢宮秦地在巴蜀漢中故漢

宮也始皇所居感陽宮也

金可聖物賜先斷不是蟬非容意悲答

聞新蟬 此句有愁三時物也物聲增愁大悲

云意也秋賦悲哉為秋二條

賦云賦未變莫言秋後遂遂紅紅言

歲二年蟬音與今年聲不違也

本文云去年今年聽音不變莫言後年

起三前詩也後漏漏冠事也劍寫入水虎
 圓似初月指出也次句說此劍事秋風不
 不明後設之後初分東方見月出也而初
 不期後惟講利風未至初輕加按期詩
 何又稱清搜白頭劍賦上劍詞
 藏月入懷中鴻尾班非蓬葵迥不同
 盛夏不消雪終年無盡風引秋生事表
 自然也圓因在制功賦如松花簪飄似鶴鬢

秋又可來也秋後無雪不可思也
 扇說文云扇有屏也又名合扇也
 提天高如瑞氏連解
 盛夏不消雪終年無盡風引秋生事表藏
 月入懷中白扇詩
 盛夏等雖夏團雪之劍似不銷雪也終年
 扇風無盡動必有風引秋涼風生於扇
 從年中秋三境之也藏月以扇指入懷
 中藏月入懷也文集六十五白扇素是

通記今謂水也時冠三漏冠也說文云漏

受水列即重夜百刻故風俗通言製蓋

以始攝作漏冠數年而家產死漏刻不寫

三日人皆驚故伯望堂必要使人見旱

聖元言扇雖似月當夜不可光仍本期夜漏赤

除弊之故其間疏之日本記言肅明天皇昇

皇太子初造漏冠皇太子者使臣名時十五年

漏冠置於新室始創惟時經數也日行履

之間五十冠二冠之間七方七千里也乘定將八

億五千里也日一年之內一周天度命者三百

六十五度廿五命半也月一百八十二度六十分

六十五也

秋三篇秋未教孰時也

三秋月令云立秋日涼風至

蕭颯涼風不至者國有甚亂也誰教言會一時秋

秋三涼風令知時誰相議我者與秋其去

曰聖有三月產子伯異又曰孔聖論語云德配
 問於伯異曰子有異聞乎孔聖曰為伯異對曰
 來也嘗獨立所聞有異也孔聖曰三謂孔子也鯉趨而
 趨進曰與子諸乎對曰未也曰不與子詩無以言也
 鯉退而與子詩他日又獨立鯉趨而過庭曰與子
 對曰未也不與子禮無以言也鯉退而與子禮聞
 二美陳寢退而善曰問得三問詩聞禮又聞
 君子之達也子又論語義林也者落美也賤齊務美

身延文庫藏和漢朗詠註抄 (影印)

蕭颯也揮屬也頌自巖已生也二毛事也
 有言達癡曰官言老人驕甚曰巖也
 鷄漸散間秋也也鯉常趨處賤層層敬保無
 此句於音師登喬哥則二業落迤時詩此
 又時沒後於彼喬哥作也故有教誡之也
 聖常趨處者孔子教誡也鯉意也紅葉有錫冠名
 名也故經系漸教也成也鯉趨鯉名名
 也壯家語孔子妻產有人贈鯉異行名其子

也。小与歳之字。某之意也。故云鐘聲。慙處作遲之意也。木某者秋聲。又落故曰秋色。曰。晚聲也。

早秋

但言者隨三伏去。不知秋送三毛來。
 早秋。三毛。如大雨。有人三時謂三時感時。老時也。而養生始。已老矣。時至也。仍以秋喻人。是甚。

三毛也。文錄五十七云。春菴。但菴者。二毛。釜

無別計。相寬。厭欲。造傷。開勸。一盃。

柳華。開新。秋地。桐葉。風涼。歎。夜天。
早秋詩

楓。始。花。教。故。云。新。秋。也。又。愧。花。由。露。多。

置物也。桐葉。常。風。感。物。也。就。中。秋。菴。所。生。者。也。

芙蓉。墜。殘。衣。尚。重。晚。涼。消。到。露。先。知。
秋夜詩

上句。芙蓉。尚。殘。衣。厚。覺。也。次句。秋。氣。成。暮。露。

冷。覺。也。矣。景。也。重。擲。厚。也。惟。涼。秋。氣。也。暮。年。

竹庭 毛詩注云竹葉聲曰簫也

七夕

風走七月，初七且夜灑柳於庭露苑几筵設，
酒以祭河鼓，者，字也。或見天漢中有與
自氣以此為戲見者拜而願乞子，唯得
其元不獲，二求三年乃得，濱辭託桂陽娥
下有仙道，忽謂其弟曰七月七日織女當渡河，第
問織女何事，渡河答曰暫相牽牛，世人至今言

織女嫁牽牛是也

憶得少年長乞巧，巧，字多竹竿頭上願緣多。
廿年，廿年，男也。此句，棚機，奈事也。其作玉，
二脚，了，偷，諸，供，物，奈，牽，牛，織，女，三，星，也，奈
祀之後，七手，洗入水，以水，洗，女，人，取，正，石，踐
竹簾，付五色絲，指頭，夜半，令，見，手，洗，水，浮，豆，
行，合，時，比，不，見，彼，見，也，其，二，星，行，合，時，言，我，所，願
之事也。必，答，其，乞，事，不，乞，一，初，學，語，云，女

所等祈所求奉祭物付生頭茶牛女也女子
 付給男子懸便豆物
 二直過逢來叙別綿依之恨五夜將明嬾
 驚深風滅之聲代牛指曉聲
 緇二皇有宮半緇也依之根也五夜馬也
 嬾風也詭文之天地之數起於奉中故以
 牛句也格云物字也牛也勿無也凡天下
 万物皆是牛病所為也故物字生長万物事勿

子多以五世錢銀針獻牽牛織女巧
 荆楚託昌之婦入結練經穿之孔針或以金
 銀鑰石為針陳仇華於途中以乞巧有織字緇
 於麻葉上則以為得乞巧漢武帝故事曰帝
 有一女子愛幸也帝故令有乞以七月七日乞
 織女之天下而教巧漢武帝女子形美而巧
 世中故令有乞祈請於織女作幣帛諸祈
 供物以五色絲懸於竿頭茶之織女下教乞巧

過牛五世作也織女牛皇天下男子作妻代司
 之皇也織女司一切人所作事也余雅三靈漢
 有辛牛一名河鼓牽牛為妻婦七月
 七日得會合博物志第八篇記云天河与海
 通也有人居海渚者年八月有杳來至甚大
 往交不共其期于將海人有奇志乃三飛闔蓬查
 上多實糧食兼查而去于餘月中猶見月
 星辰自後漢二息亦不現晝夜掩至一處而
 城嶽狀如屋舍甚美麗也遙望室中多見織
 婦一丈夫牽牛謂後飼之夫驚問何曲星
 此海人見說來意亦問此何處答曰君還至
 蜀問嚴君平則可知之竟不上岸因使僮選
 如斯至家後乃到蜀問君平曰其年其月
 有客星犯牽牛宿詳到天河時也風俗傳
 云七月七日牽牛織女度河以結歡好織女星一
 名仙娥牽牛星一名天擘一名河鼓也云天河与

過牛五世作也織女牛皇天下男子作妻代司
 之皇也織女司一切人所作事也余雅三靈漢
 有辛牛一名河鼓牽牛為妻婦七月
 七日得會合博物志第八篇記云天河与海
 通也有人居海渚者年八月有杳來至甚大
 往交不共其期于將海人有奇志乃三飛闔蓬查
 上多實糧食兼查而去于餘月中猶見月
 星辰自後漢二息亦不現晝夜掩至一處而
 城嶽狀如屋舍甚美麗也遙望室中多見織
 婦一丈夫牽牛謂後飼之夫驚問何曲星
 此海人見說來意亦問此何處答曰君還至
 蜀問嚴君平則可知之竟不上岸因使僮選
 如斯至家後乃到蜀問君平曰其年其月
 有客星犯牽牛宿詳到天河時也風俗傳
 云七月七日牽牛織女度河以結歡好織女星一
 名仙娥牽牛星一名天擘一名河鼓也云天河与

地河相連音漢武帝時年八月有登臺至其末

甚大往來不共其期干時武帝後張騫嘗躬河

源鴛鴦振食乘登至臺中國中見織也

河曼流紉織女問君是何人嚳曰余是漢帝

使錢窮河源有云七月七日鴛鴦河底

織也皇切織言皇宿詭文萬物之文料第入

三夕代牛女惜曉史應詠家野美材夫七

月七曾定走往期也仰林河之歌瞻自第之帝

寢夜之人以此為應登仙三誘信而有致人

語諸臣曰佞儻相親天人推易離難曾人甚所

傷算代牛女惜曉更臣奉綸綉敢獻言韻

厚更二日過過之聲時後香是散粉綵綵

飄雲宮人懷私之願似向不同星宮巧之情

隨分應星臣有一事非富非奇家貧親老

庶不擇官介已

露應別淚珠空落雲是錢粧髮未成可起言

也似半月也有所三月七日鶴一雙來此指文
 為橋與織女過百詠注曰鶴橋似虹也又如鳳凰
 渡天河也鶴橋風俗記云七月七日鶴毛影
 以月喻炬七日夜月夜半後入故行燭欲消急
 事也行燭以月喻也欲消二里行舍事夜半也而
 去衣脫懸衣也震應濕以臨為天人衣云
 去衣與震應濕行燭流月欲消急
 此次句讀多置別渡思也

風從昨夜聲蘇怨露及明朝渡不禁
 風從過夜亦恨成自此後待相會期違故
 為然用疑也
 頭憂雲暴救言織女害為別渡之珠以雲
 盈盤以与王人日泉客慷慨以泣珠文集云
 六指人出水中宿入家臨去泣而出珠
 似也有下分云豎未成也即入道云自成
 曉露是別渡覺之也次句雲亂聲未攬上

為漢河橋渡三星也有三多鶴飛列並羽為

橋也松三鶴一雙為橋者其鳥以外大鳥孫柯

僧伽經空中有五白大河

詞託菰波雖且遣心期斤月欲為媒翰昭竹竿也

天河波往來付此互乖通消息心期七月七日

以為媒也所月七月高夜月世乃二月也

上ノカトキヤクニマシヨクニ

トカクニマシクニマシクニ
人死

トカクニマシクニマシクニ
初極

因啓入道言此哥人間五十年下天五百夜交

相違也充不審也但和哥夕ノ子兄ニノ事ヲ

歌松云四天五日時年達嘉事ノ七九

振七上其中心事侍釋迦佛上切天二夏

九十月為曲詭法給奉天上九十日也人間

十日也是時節不思議也如蓮華強以法性

相不可難之歌

秋興

林間爇酒燒紅藥石上題詩拂綠苔。

佳林中，莠特以紅藥溫酒，登石上宴，特拂苔。

書詩也，以亦有為對也。

楚思，秋思也。云水冷高齋，清脫言秋。

楚思者，愁意也。有楚歷原楚辭，曰悲哉秋。

為氣，是楚客思事秋。私疑思者愁切。

意也。張江建，注：水長也。雲水廣。

〔家紋見返〕

夏一 夏二 夏三 夏四 夏五
夏一 夏二 夏三 夏四 夏五
夏一 夏二 夏三 夏四 夏五

晚夏六 花橘七 郭公八 螢九 蟬十

扇已上夏部 秋十二 立秋十三 早秋十四 七夕十五

秋興十六 秋晚十七 秋夜十八 八月十五夜十九

月廿 九月九日廿一 菊廿二 九月盡廿三

女郎花廿四 菝廿五 蘭廿六 佞臣覆國文 有興文集文

和漢朗詠註上二

夏 淫浸也、玉篇云、夏次春之時也 文

45 背壁燈 殘經宿 始開箱衣帶 隔

年(卷) 白早夏曉 興詩

春燈殘至于夏 古衣今始將著云也、三月卅日

春也 四月一日 夏也、故經 宿春燈 殘光至

于夏

云也、更衣之時開箱取出近會生物、本查不 失

于今有云也、背壁者、背我向壁也、文集六十

七云、窗明簾薄、透朝光、臥整巾、簪髮起、下床

背壁〇年杏、無情亦任他春去、不醉爭銷得日

長、一部金鏤清商一壺酒、與君明日、煖新堂、夢得公 新作

西堂、故云、新堂也、

46 生衣金鏤欲待家人金鏤著 宿金鏤 釀酒招

邑(豐老) 酣 管丞相

惜春絕句 上句夏衣待人著云也 下句酒呼邑

長老共、可飲云也、生衣、家人也、宿釀

故酒也、玉云、女 邑老里長老也 酣 飲酒事也

樂酒也、不醉也、夕ケナハス 酒醉程也

有云、醉少サメ方成、タカナハト云也、有云、ヨキホトニ

度招邑(豐老)會飲上於甘樹下云々 論語云、

鄉 人飲酒、杖者出、期以出矣、注曰、孔安國

曰、杖者老也

人至也、鄉人飲酒之禮主於老人、々々禮畢出孔子從

而出也 文

●首夏

148 ●蕤頭 竹ハ蕤葉ハ蕤經ヘテシヨクニ熟ハ蕤蕤階底 蕤全

蕤全蕤入レ夏開 白

27 蕤於頃反 瓮又作カメ ●竹葉ハ酒名 百詠注曰、宜城大鬯也 (モタキ)

出竹葉酒 文 有云、昔秦世有牧士、取竹葉飼

馬、其馬多食竹ハ蕤葉ハ醉、故取醉本云竹ハ蕤葉ハ蕤也、彼馬醉死後、從鼻竹生、少兒共取之、爲馬乘之

遊也、依之少兒壽五百歲也、君至壽子至祝此(乘)竹馬遊給事也 云々 有云、未見本說可尋之、有云、

昔後母 惡 外子 與麴盡食 外子不食之 三跨 木取

前置 成麴 後置 物成實 漸次成酒 爲不

忘(其)

木折竹支指之 故云竹葉也 云々 世間酒家指 竹葉此意歟云々

三木(者)

三股 木生 故也 云々 言法師サカホカ井ニ ●蕤蕤

本草云、一夏 早花開文

149 ●昔生 石ハ蕤面(蕤)至夜至蕤短 荷出也至蕤

張大雀廿四 飲 蕤頭 ○入夏開 ●似火深深(紅) 壓架

如 餽氣香味綠 結臺 試將詩思 相招去

儻 有風

情或可來 明日早花至應更好 心期同醉 卯全蕤

時至至 巳

149 ●昔生 石ハ蕤面(蕤)至夜至蕤短 荷出也至蕤

輕衣者生衣也 言、青苔似生衣、荷葉似花蓋云也、

疎者マレナル心也、輕衣者苔也、

151 ●風吹 枯至木ハ蕤蕤天至蕤雨月照 平至到全蕤夏

夜霜 白

文集廿云、江樓夕望 海天東望 夕花至蕤、山勢以形

歸復長、燈火万家城 四畔 ●星河一道水中央 ●風

吹古木 ○夏夜霜、能就江全蕤樓 銷暑否、比君

第拾五

校清金響涼ナリ 已上晴天雨ト者、朽木ノ小枝、
落必雨ニ云歟

152 風生竹夜窗間取 月照レ松時臺金上 白松臺竹
窓意ヲ

文集十九云、早夏朝歸閑齋、獨處、隅題七言十

二句、因贈駕部吳郎中七兄、四月天金響氣多和

且清●縁槐陰合砂●握金平ナリ●獨騎善馬●銜金燈●金櫛

初著單文金響支體●輕●退朝 下直少徒侶●歸舍

門無送迎●風生竹夜○臺上行●春酒冷●三數

盃●曉琴閑弄十餘聲●幽●靜境何人別●唯有南

官老駕兄 已上

153 空金響夜窓閑 螢度後深●更金響軒金響白日

月明 初紀

夜欲歸房 空夜靜夜 五更曉也 軒簷 文選

47 云、月在軒文●朱●ナシノヨ●フスカトスレハホトノキス 實之

シノハメトハ、アケホノニ、ヒムカシノヤマキハソラノ、シロクナリ

端午クスリヒ

風上記云、仲夏夏午端午ノ日、端始也、謂

五月五日也

說云、楚人屈金響平至五月五日當初午之日、(若)汨金響

羅金

水而死、故五月五日曰端午、楚國人每迎此日、以將

葉納飯、以五色絲卷入水、祭屈平、初學記云、

端午者、

端始也文 弘決云、汨為筆反、去兒也、疾也、亦

流急也

154 私云、五月初午日當第五日端午云也、五月初午

日本可有五日也、午者五也、故五月五日云端午

也、五月當午月也、月金響冷云、五月建午之月也、

俗云、

五月、是午也、此日万事可滿長日、故用此日祝養也、

有云、昆明池南岸端石上生昌參補金響、彼長生金響

藥也、

彼云端午、昌補、午南也、故南端昌補也云々

抱朴子曰、藥、衆參服昌補、十三年、身生毛、

日スル視書ヲ萬

言皆悟ク、冬ハ相シ不寒、又昌補須得生テ石ニ一寸九節

已上ニ紫華ハ尤善矣、私云、石昌補也

有時ニ當テ危ニ身ヲ立テ無シ意ハ故ニ園ニ任シ脚ヲ

賦ス艾人菅家

上句五月五日ニ艾ヲ立ル人ノ門ニ極メ危ヲ見ユ云フ也ニ

下旬五月五

日朝ニ當テ艾人露ニ人無病也、任脚行者ノ荆ニ兼テ歲時記ス

人ノ無病ノ艾ヲ迎テ反ス艾ハ大ニ反ス有時ハ五月五日ニ

也、艾

人者白蓬也、似人形ニ事有也、是謂艾人也、五月五

日立門ニ、鬼神見之ヲ、作シ畏ラ不成ニ崇ヲ也、荆ニ兼テ疑シ也ニ

歳時記ス

云、採艾人懸門戶上ニ、攘除毒氣也、文江談云、五月

五日ニ以端午ノ蓬ヲ作人形ヲ、立門ニ、當其風ニ万病除ス

也云、有云、五月五日ニ昌補ヲ加艾ノ葺屋ノ事ハ、為除火

事也、又夏ハ毒螫ノ人事有、昌補ノ懸袖ヲ後、不

身延文庫藏和漢朗詠註抄(翻刻)

警其人云、五月五日ニ藥玉ヲ、有消息云、藥玉ハ一

流作以百草之花、實以五色之縷、摸草蟲形ヲ、

其花房云、風俗通云、五月五日ニ以五色ノ絲ヲ繫ノ臂、

乃攘惡鬼、令人ノ不レ過病、俗謂五色、絲ハ為白索、

一名長命縷、一名續命縷、一名辟兵縷云、(師曠占

曰、歲多ノ病、艾草先生云、有云、五月ニ從南方ノ羅刹

國ノ毒風吹來、若有人ノ民中ニ其風者、衆病發起、而

五月五日ニ採艾ヲ作人形ヲ、著五絲ノ衣ヲ、立門戶ノ外ニ、

為我身ノ代也云、有云、毒風來者、從彼南方ノ惡

(毒)鬼來、為奪一切衆生精氣也、而見艾人立

門ノ作シ畏ラ不入其門云、有云、昔高辛ノ氏ニ有八十人ノ王

子、其中一人入海死矣、五月五日也、則成毒蛇ヲ為國

作崇、國王集群臣ヲ、問攘災計ヲ、有臣申云、黃帝時ニ、(毒)

尤之靈亂國之時、以二事ヲ除之、一以幣帛ヲ祭之、二以

制伏ノ靜之、此亦可然、由此先作降伏、蛇中有安全

制伏ノ靜之、此亦可然、由此先作降伏、蛇中有安全

制伏ノ靜之、此亦可然、由此先作降伏、蛇中有安全

也。免云毒蛇、首赤身青、背有綾文、採似彼草。

切之、淫酒飲之、即昌蒲是也、依之除其難卑、

是制伏相也、俗人昌蒲名安也、免切根淫酒飲之、

勝纏首結、表降伏相也、私云、昌蒲名安也免草、

事、日本語也、不被得心、有人云、堀河院匡房、

奉昌蒲解文云、進上右葉昌蒲千年五月五、

日大江爲、天皇并殿上人、皆不能讀之、仍匡房、

令尋問之、讀云、タテマツリアクルシキノアヤメクサ、

アヤメクサトハ昌蒲也、其根似蛇、故蛇ヲハアヤメト云也、

或説云、宗則云人、五月五日昌蒲冠ラシテ行道、見

女人美下、オホケナキ心ツキテ思死ニキキ、昌蒲モ

宗則共クチナニ成リニケリ、ソレヨリ昌蒲アヤメ

ト云也、蛇アヤメト云故也

納涼、有云、メ、シキヲ入ト云事也、極熱之時解、帯、紐、

風所吹也、俗、遊戯、謂之納涼、亂、威儀、遊、也、

16 靑草、下、地、上、銷、殘、雨、後、綠、樹、陰、前、逐、晚、遊、

涼、白、納涼意也

三伏極熱時雨降涼其體作也、苔上雨、只有

靑苔、不見雨氣色云也、次句夏暮、木影、

涼云也

16 露多、草、清、夜、迎、夜、滑、風、動、綠、葉、讀、云、

灑、先、秋、涼、白

池上秋憶、簾者竹筵也、夜涼成意也、次句夜袖、

風吹入非秋之心地云也、露、簾、涼、簾者竹筵、

有云、唐土、藩州、唐人、夏月、編、青、竹、爲、簾、敷、床、間、以

招涼云、竹性涼故、爲招涼故用之也、是可然人所

爲也、非凡人事云、文選云、珍、露、簾、清、夏、

室、懸、班、扇、動、

涼、聽、文、滑、涼、事、也、

● 遊、蘭、臺、風、襟、文、選、云、楚、襄、王、

之宮、宋、王、差、侍、有、風、簾、然、至、王、

乃披、襪、當、日、快、

哉、此風寡人與庶人共、斂、文、蕭、灑、涼、云、事、有、云、

衣、隨、

風動云爾也云々 聲音發 青トアサマカナリ

162 不是禪房 疾風無熱 但能心靜

即身涼 師房白

夏暑有禪房 而僧心清 身涼云也 文集十五云

師禪房 疾風 人之避暑者走如狂 獨有

禪僧不出房

不是禪室 疾風無熱 身涼已上

163 班婕妤 疾風之扇 代岸 風至轉令長

疾風之珠 當以月入轉過今自得 大江巨倫 文粹第八

團雪之扇 何為避暑者 居水邊云也 招涼

之玉無益

月明夜甚涼云也 字書云 婕妤者婦人屬官也

有云

班者姓 婕妤者職也 班名也 婕妤者官也 國王

寵愛

之夏極熱之時 作扇賜之 其扇圓而白 故云

團雪之扇

164 之扇也 文選云 婕妤至漢武帝妃也 姓班

失寵 作テ

團雪扇詩云 新裂齊紈素 皎潔如霜

雪之輕 裁為合

歡至扇 團之類 明至月入輕過 出入君懷 袖多

動搖至 微至過 風至轉發 恒

怨 秋節至 涼颺奪於熱 已上 日本扇名 蝙蝠

白蝙蝠 有云 日本國扇名 蝙蝠事 天智天皇時

始也

蝙蝠來扇 燈 天皇御覽 之始 作扇故也 云々

燕至轉 照至王至有 方 至王 照 車前後各十二

車也 燕至轉 王至對

楚王問曰 貴妾國之轉何寶 楚王曰 朕國無

寶 照王曰 寡

人至過國寶 謂招至涼至珠也 晝卻炎氣卷

夜照十二車 楚王

間守^{マモル}爲使^{ヲシ}

〔卷〕遊行諸國求之、而其方不知求^ム行之間^ニ、
常世^{トコヨ}、

之國到^リ者、花橘^{ハナキウ}求^ム得^テ、累袖^{ツルソデ}持來^ル也、其間^ノ十^ニ、
九年

也^ニ。由此花橘^{ハナキウ}昔^ノ事^ハ云^ハ始^メタル也^ニ。常世^{トコヨ}國^ノ、
神仙^{カミノト}爲^シ轉^ス也^ト申傳^フタル、日本記云、垂仁天皇元年

壬辰新羅王子貢物九種之中、在香菓、今謂之橘也^{云々}、
又云、同即位七十八年酉、天皇遣但馬毛理^{モリ}、於常世^{トコヨ}

國^ニ令^シ求^ム香菓^ヲ、而使不還^ラ之間^ニ、庚午^{ケイヌ}治^メ九十九年^ニ、即位^ス、
天皇崩、景行天皇即位^ス。辛未歲自常世國還^ル、

即捧^テ大甘子等九種香菓^ヲ、獻^シ垂仁天皇之陵^ニ、
啼泣^シ曰、受命^ラ一度水^ヲ、往來之間^ニ、經^テ十餘箇年^ヲ、御

〔守〕之時、親承宣命^ヲ、向於陵基^ニ、雖經奏聞、無重宣^ス
之音、臣獨生何益、叫哭^シ自死^ス、群臣爲其造基於^ニ、

陵側^ニ云々

176 風^ハ金^ノ刺^シ尚^カ老^シ菜^ハ懸^ハ蕭^ハ懸^ハ條^ハ金^ノ緑^ハ水^ハ蓼^ハ金^ノ殘^ハ金^ノ、

花^ハ金^ノ懸^ハ寂^ハ懸^ハ莫^ハ懸^ハ紅^ハ白^ハ

風荷^ハ等^ハ蓮葉^ハ風被^ニ吹^カ云^ハ爾^カ也[、]蕭條^ハ漸^ク秋^ニ成^リ蓮池^ニ
□云、一^ト者^ハ草木^ノ衰^ル兒^也、毛詩注云、荷扶^ハ蕊^也也、
說文云、

177 扶^ハ蓮華^ノ末^ヲ發^ス者[、]爲^一也[、]已發者^ハ不^レ嫩^ニ、
芙蓉^ハ、說文云、藕^ノ華^ノ之^レ發^ス者^也、水蓼^ハ生水^ニ、
テ也、寂寞者衰兒也

177 葉^ハ展^ル影^ヲ翻^ル當^ハ砌^ノ月^ハ花^ハ開^キ香^ハ散^ク入^リ簾^ニ風^ハ白^ク

階^下蓮詩[、]蓮葉風被吹當階[、]若高欄箒子翻^ル、
夜日月^ハ見^ル云^也、次句蓮花香入簾^内荷^也云^也

砌簾^ノ兩字^ハ作階意^也、文集十六云蓮^{階下}、葉展[○]
風^ハ不^レ如^シ種^ハ在^ル天^地上^ニ、猶勝^ル生^ル於^野水^中ニ^也上^ニ

178 煙^ハ開^キ翠^ハ金^ノ扇^ハ清^ハ金^ノ風^ハ懸^ハ曉^ハ水^ハ泛^ク紅^ハ金^ノ衣^ハ懸^ハ白^ク、
露^ハ金^ノ秋^ノ許^ハ唐^ノ人^也

上句曉見池蓮葉[、]似^レ開^{タル}青扇^{云也}、次句蓮花亦[、]
冷水色^ハ敷^キ紅衣^見云^也、翠扇^ハ蓮葉^似、清風^ハ秋風^也

179 岸^ハ金^ノ竹^ハ懸^ハ條^ハ低^ク應^ハ鳥^ハ宿^ハ懸^ハ潭^ハ金^ノ荷^ハ葉^ハ動^ハ是^也、

思議解脫、莫極ルハ於維摩詰經、凡二万七千九十二言、攝シテ四生九類、入ルモ無餘涅槃、實無得度者、莫先於金剛般若波羅蜜經、凡五千二百八十七言、壞アリ過ラ集福、淨ルハ

一切惡道、莫念ナレ於佛頂尊勝陀羅尼經、凡三十二十言、應念ル願、生ル極樂土、莫疾キ於阿彌陀經、凡一千八

百言、用正見觀真相、莫出ル於觀普賢菩薩行法經、凡（抄實）七百九十言、詮シ自性ラ認ル本覺、莫深（抄實）相波羅經、凡三千一百五言、空法塵、依佛智、過（抄實）於般

若波羅蜜多心經、凡二百五十八言、是八種經具十二部、合一十二万六千八百五十七言、三乘之要指萬佛之秘藏盡矣 文

郭公郭國公、喪所憶哀泣、而為（抄實）驚下、仍（抄實）為名ト焉（抄實）文
有云、時鳥又曰郭公明（抄實）公云事也、明王政有八種、食一

貨ニ禮ニ司保（抄實）司寇（抄實）司功（抄實）司徒（抄實）六賁（抄實）師ハ是（抄實）謂ハ政（抄實）

也、此中食始有之、然彼鳥早田期過、時不熟也、鳴（抄實）故人民先教、食政如明公、故云郭公也 云々 私云、此說違（抄實）

上、郭國之公說、可尋之、内郡入道云、郭公有多說、一說田作鳥云也、其故速田作過時不可熟、鳴故云々 一說（抄實）四手（抄實）タヲサト云義アリ、シテ（抄實）コトトビ（抄實）ツリユイタル小童ニテアル故也 云々 一說（抄實）クキヲ鳥云、俊賴說也 云々 江談云、式部卿談云、郭公者非真也、

沓手負鳥呼云、保土之岐寸岐受々々々々々云也、（抄實）郭公者、隱居於卯花垣、云コトシ事々々

也、又乃葉集云、藍縷鳥（抄實）鷺子也、昔人見大鳥、羽毛漸具、故其羽、見之即奇、思之間、ホトキスヘクト鳴飛去云々、口傳抄云、垂仁（抄實）天皇崩後、御忌之間、夜

非時空郭公鳴過御殿上、屋（抄實）上落物聲有、召人

以燭照之求得、檢文有、開之白紙青文

見、至秋素天金星白而小、映於素天、因不見也、是故早没云也、雖不能載於筆墨、爲備廢忘、乍憚書付之、尤可憐々々、有云、尊屋王者、

七、頭四星之中、馬微細星也、云々、螢火、月令云、

六月中氣日腐草爲螢、若不爲者、國臣有亂、云々、

孝德天皇第七代、大化年中、念食采女下女、而天皇崩給、

後、彼女奉戀天皇、乍生被築籠陵、件女成、

發、陵邊池有、21+、私云、垂仁以前禁中上下、

諸人

一人不殘、皆築籠陵中、其陵口塞、而第十一

代帝垂仁天皇之時、築河內國古市陵、埋生人

事、依有智臣奏達被留之畢、由此彼大臣、似

禁中土人形作代之埋了、帝王感之賜土師

姓、北野天神先祖也、河內國土師寺土師大

臣建立也、後賜菅原姓、云々、

188至兼至輕葭水暗、22+發知夜、楊垂柳正風高、

鷹カ送ユ秋フ白ハ暉

21+上句葦繁生所暗、不知晝夜、而螢知夜、燈火云

也、次句秋風吹時鷹送秋來云也、救注云、鷹者、

胡國鳥也、秋來南翔、胡塞多榆柳云々、

189明、至仍在誰追月光於屋上、22+時々不、

豈積カ片於床頭ニ、22+秘螢照袂賦、

螢火明、誰爲見書、追月光於屋上云也、次句丹

鳥皓々、誰爲學文、集白雪於案頭云也、明皓々、

白兒也、救云、螢火映徹兒也、漢記云、車胤者漢

人也、家貧好學、不能得燭、夏月聚螢、裏紗

囊、以是讀書、後爲漢博士、位在丞相上、文

漢書云、江全輕澁字士全情至、勤學人也、家貧、

無油、清

夜、月光讀書繼日、無且止時、明月之夜對

月、見書、月漸傾光登屋上、江波追光而昇

屋上、隨光追之、從屋上落打其脚也、後至后

史大夫云、俗月夜見書爲急、是故也云々、孫全輕子

(世)錄云、孫至德康家貧、冬月無油燭、床(下) (取)テ

雪讀書云々

190 山經卷之裏疑過 岫至海至賦至篇至轉中似

宿至流 橘至幹

秋螢照帙詩 帙書帙也、山經者、山海經也

夏禹所製之書也、文選云、陶至淵至轉明至讀至山

經、注云、山海經者、所記衆至山至百至轉川至草至

木至適禽獸之

書也、潛讀之、因而發詠也、海賦篇、文章志云、

木至轉華至字至玄至虛至轉廣川人也、奉海賦、其文甚

俊麗、足繼前良、文岫者、初學記云、山穴曰

234 岫、文 山頂曰岫也、此詩車胤聚螢讀書事、為本

文也、蒙求注云、車胤至字至武至適子至河至東至轉人

也、家貧

無油、拾螢入紗囊、以其光讀書、繼日焉、後為

漢博士、位至司至徒至

蟬

身延文庫藏和漢朗詠註抄(翻刻)

193 暹 暹、今今春、日玉、登 暖 今 暹至轉泉至溢

風山蟬鳴 今宮至轉樹至紅

唐書曰、驪山宮、天子避暑地也 云々 百詠注曰、崑

崑山有玉甃、驪山雖無玉甃、讚帝宮而取喻

234 也、溫泉者、初學記云、驪山陽篇曰、秦始皇至與

神至女至湯遊而忤其日、神至女至湯 之則

生瘡、始皇怖 謝

神女為出溫泉、而洗除、後人因以為驗、但今篇句

者、不可謂實溫、已作玉甃、付文章之心、可謂

依暖日似溫也、長安西去不遠、有山名驪山、

彼有

宮名驪宮也、唐太原五年王在位五歲、一度不

行彼宮、其故者、王一日行幸、貴中人百家財至產至

故止之也、暹、ウラウレ 弱、奴鳥反、他鳥反

194 今至轉至羊至鳥至路至舍 梅至雨至五至至月至轉至蟬至聲

送麥入鬻秋 祐嘉 作

又李端祐
許渾唐人也
而雨
鳥路者空名也、初學記云、梅熟スルトハ 〓

曰梅雨、江全ニ轉ニ東ニ呼テ為シ黃梅雨、文月令曰、百ニ轉ニ 〓

殺ハ轉ハ各以其初
生ラ為シ春ト、其熟ヲ為シ秋ト、故麥ハ以テ孟夏為シ秋ト、有處云、
六月ニ莠熟而枯ル云々、有云、麥秋者四月歟 〓

見初學

記云々、十門辨惑論云、夫二儀ニ覆ハ轉ハ載ハ〓

四序生レ成ル、夏氣

長シ羸ト、隴麥ハ轉ニ以テ之惟悴ナリ、秋風淒豎トモ、巖桂以 〓

之芳ニ轉ハ非レ金ト、

春日遲ト、未可使菊ニ華榮、冬霜ニ覆ハ轉ハ載ハ〓

松貞ニ搖ニ落ニ已上、假名注云、下句麥秋者四月名也、

百穀皆其生時春、其熟時秋也、故麥四月秋

也、月令見言、五月空鳴蟬ハ麥秋送過ト云也、

195 爲下、綠ハ轉ハ蕪ニ秦ニ苑ニ寂ト、蟬鳴ハ黃ニ葉ニ轉ハ漢ト 〓

宮ニ轉ハ秋ト、許渾賦成、陽宮詩也

宮庭草ニ繁ト、鳥不驚ト云也、次句蟬鳴ハ林中ニ漢
宮ニ轉ハ衰ト云也、秋衰ハ心也、蕪者荒也、庭草ハ多生ト 〓

荒ニ轉ハ蕪ト 〓
無道也、秦始皇園荒事云爾也、秦園上林園

也、秦始皇花園也、勅鬼神ニ築城事三千里也、
其内秦園也、漢宮、秦地ニ在レ巴蜀ハ漢中ニ、故云漢

宮也、始皇所居感陽宮也、

196 今年ハ異ト例ト、腸先ハ不レ是ト蟬ト、悲ニ轉ハ意ト 〓

如シ管ト 〓

聞新蟬、此句有愁之時、物色物聲增レ愁人悲ト、

云意也、秋興賦云、悲哉、爲レ秋ノ氣ト云々、

197 歲去歲ハ來聽ト、不變ト莫レ言ト、秋後遂ハ爲レ空ト 〓

金轉 紀納言

歲々年々、蟬音與今年聲、不違云也

本文云、去年今年聽音ハ不變ト、文、莫言ハ等後年、

秋又可來也、秋後無年不可思ト云也、

198 翫ハ說文云、翫者靡也、又名合歡也、
混天圖云、女媧ハ氏ニ造レ翫ト、

200 盛(カニ)夏(カニ)全(カニ)不(カニ)消(カニ)雪(カニ)終(カニ)年(カニ)無(カニ)盡(カニ)風(カニ)引(カニ)秋(カニ)生(カニ) 〳〳

手(カニ)裏(カニ)藏(カニ)

月(カニ)入(カニ)懷(カニ)中(カニ)至(カニ)靜(カニ) 白(カニ) 翫(カニ) 詩(カニ)

盛夏(カニ)等(カニ)雖(カニ)夏(カニ)團(カニ)雪(カニ)之(カニ)翫(カニ)、似(カニ)不(カニ)鎖(カニ)雪(カニ)云(カニ)也、終(カニ)年(カニ)等(カニ)

颯(カニ)風(カニ)無(カニ)盡(カニ)、動(カニ)必(カニ)有(カニ)風(カニ)、引(カニ)秋(カニ)等(カニ)涼(カニ)風(カニ)生(カニ)於(カニ)翫(カニ)、

從(カニ)手(カニ)中(カニ)秋(カニ)立(カニ)覺(カニ)云(カニ)也、藏(カニ)月(カニ)等(カニ)以(カニ)翫(カニ)指(カニ)入(カニ)懷(カニ)

中(カニ)、似(カニ)取(カニ)月(カニ)入(カニ)懷(カニ)云(カニ)也、文(カニ)集(カニ)六(カニ)十(カニ)五(カニ) 白(カニ) 羽(カニ) 翫(カニ) 素(カニ) 是(カニ)

267 自然(カニ)色(カニ)圓(カニ) 因(カニ)裁(カニ)制(カニ)功(カニ)至(カニ)靜(カニ) 颯(カニ)風(カニ) 如(カニ)松(カニ) 起(カニ) 籟(カニ) 〳〳

飄(カニ) 似(カニ) 鶴(カニ) 翻(カニ) 空(カニ) 〳〳

盛(カニ)夏(カニ)不(カニ)消(カニ)雪(カニ)、終(カニ)年(カニ)無(カニ)盡(カニ)風(カニ)、引(カニ)秋(カニ)生(カニ)手(カニ)裏(カニ)、

藏(カニ)月(カニ)入(カニ)懷(カニ)中(カニ)、麀(カニ)尾(カニ)班(カニ)非(カニ)匹(カニ)、蒲(カニ)至(カニ)葵(カニ)至(カニ) 〳〳

不(カニ)同(カニ)、

何(カニ)人(カニ)稱(カニ)相(カニ)對(カニ)、清(カニ)瘦(カニ)白(カニ)頭(カニ)翫(カニ) 〳〳 賦(カニ) 翫(カニ) 詞(カニ)

201 不(カニ)期(カニ)至(カニ)夜(カニ)漏(カニ)空(カニ)初(カニ)分(カニ)後(カニ)唯(カニ)翫(カニ) 秋(カニ)風(カニ)未(カニ)至(カニ)前(カニ) 〳〳

輓(カニ)金(カニ)翁(カニ)搖(カニ)明(カニ)年(カニ)月(カニ)六(カニ)經(カニ)壽(カニ) 詩(カニ)

不(カニ)期(カニ)等(カニ)日(カニ)沒(カニ)之後(カニ)、夜(カニ)初(カニ)分(カニ)東(カニ)方(カニ)見(カニ)月(カニ)出(カニ)云(カニ)也、而(カニ)翫(カニ)

圓(カニ)似(カニ)初(カニ)分(カニ)月(カニ)指(カニ)出(カニ)云(カニ)也、次(カニ)句(カニ)翫(カニ)此(カニ)翫(カニ)事(カニ)、秋(カニ)風(カニ)不(カニ)

身延文庫藏和漢朗詠註抄(翻刻)

起(カニ)之(カニ)前(カニ)許(カニ)云(カニ)也、夜(カニ)漏(カニ)漏(カニ)翫(カニ)事(カニ)也、銅(カニ)筒(カニ)入(カニ)水(カニ)、尻(カニ) 通(カニ) 穴(カニ)、令(カニ)漏(カニ)水(カニ)知(カニ)時(カニ)翫(カニ)云(カニ)漏(カニ)翫(カニ)也、說(カニ)文(カニ)云(カニ)、以(カニ)銅(カニ)筒(カニ)

受(カニ)水(カニ)、刻(カニ)節(カニ)晝(カニ)夜(カニ)百(カニ)刻(カニ)矣(カニ) 文(カニ) 救(カニ)云(カニ)、風(カニ)俗(カニ)通(カニ)云(カニ)、 〳〳

壺(カニ) 氏(カニ)至(カニ)始(カニ)構(カニ)作(カニ)漏(カニ)至(カニ)翫(カニ) 數(カニ)年(カニ)而(カニ)繁(カニ)響(カニ)壺(カニ)死(カニ)、漏(カニ)至(カニ) 〳〳

三(カニ)日(カニ)、人(カニ)皆(カニ)驚(カニ)、伎(カニ)伯(カニ)曰(カニ)、繁(カニ)壺(カニ)必(カニ)憂(カニ)、使(カニ)人(カニ)見(カニ) 〳〳

之(カニ)果(カニ) 〳〳

而(カニ)死(カニ)言(カニ)ハ、翫(カニ)雖(カニ)似(カニ)月(カニ)、當(カニ)夜(カニ)不(カニ)可(カニ)光(カニ)、仍(カニ)不(カニ)期(カニ)夜(カニ)漏(カニ)、亦(カニ)

除(カニ)熱(カニ)之(カニ)故(カニ)夏(カニ)間(カニ)翫(カニ)之(カニ)云(カニ) 〳〳 日(カニ)本(カニ)記(カニ)云(カニ)、齊(カニ)明(カニ)天(カニ)皇(カニ)五(カニ)年(カニ)

皇(カニ)太(カニ)子(カニ)初(カニ)造(カニ)漏(カニ)翫(カニ)、天(カニ)智(カニ)天(カニ)皇(カニ)使(カニ)民(カニ)知(カニ)時(カニ)、十(カニ)五(カニ)年(カニ)

漏(カニ)翫(カニ)置(カニ)於(カニ)新(カニ)臺(カニ)、始(カニ)打(カニ)候(カニ)時(カニ)鐘(カニ)鼓(カニ) 〳〳 日(カニ)行(カニ)度(カニ)一(カニ)日(カニ)

之(カニ)間(カニ)五(カニ)十(カニ)剋(カニ)也(カニ)、一(カニ)剋(カニ)之(カニ)間(カニ)七(カニ)万(カニ)七(カニ)千(カニ)里(カニ)也、乘(カニ)定(カニ)卅(カニ)八(カニ)

億(カニ)五(カニ)万(カニ)里(カニ)也 〳〳 日(カニ)一(カニ)年(カニ)之(カニ)内(カニ)一(カニ)周(カニ)天(カニ)、度(カニ)分(カニ)者(カニ)、三(カニ)百(カニ)

六(カニ)十(カニ)度(カニ)廿(カニ)五(カニ)分(カニ)半(カニ)也、月(カニ)一(カニ)百(カニ)八(カニ)十(カニ)二(カニ)度(カニ)六(カニ)十(カニ)二(カニ)分(カニ)

七(カニ)十(カニ)五(カニ)也 〳〳

秋(カニ)五(カニ)篇(カニ)云(カニ)、秋(カニ)禾(カニ)穀(カニ)熟(カニ)時(カニ)也、

〳〳

〳〳

立秋月令云、立秋、日涼風至、若不至者、國有荒亂也、

205 蕭蕭蕭蕭、風聲也、涼風涼風、金聲與衰、與衰與衰、金聲與衰、誰誰、放放、計計、會會、

去一時去、秋秋、白

秋立涼風金聲令知時、誰相議我、與秋共衰與秋共衰、

云也

204 蕭颯蕭颯、悴鬢悴鬢、齡傾齡傾、白髮白髮、已生已生、云也、一、毛毛、去去、蕭蕭、

事也、

有云、官官、去去、途途、至至、廢廢、日日、官官、至至、冷冷、老人老人、鬢鬢、衰衰、

曰曰、鬢鬢、去去、冷冷、云也、云、

206 鷓鴣鷓鴣、漸散漸散、間秋間秋、色少色少、鯉鯉、上常趨上常趨、處處、晚聲晚聲、

微微、去去、慶慶、滋滋、

此句於管師管師、匠匠、去去、舊舊、亭亭、去去、賦賦、一葉一葉、落庭時落庭時、詩

此、

文時沒後於彼舊亭亭、至所作也、故有教訓之心也、

25 鯉鯉、上常趨處者、孔子教訓教訓、鯉意也、紅葉有鷓鴣鷓鴣、云

名也、故紅葉漸散漸散、秋色秋色、少少、成成、云也、鯉趨等鯉

者人名

也、孔子家語孔子家語、曰、孔子事孔子事、產產、有人贈鯉有人贈鯉、魚魚、去去、蕭蕭、

仍名其子

281 曰曰、鯉鯉、文文、有云、九月九月、產產、去去、伯伯、去去、蕭蕭、又曰又曰、孔子

鯉鯉、論語云、陳陳、去去、去去、

問於伯魚曰、子子、有異有異、聞聞、去去、融曰、以爲伯魚

對曰、

未也、嘗獨立嘗獨立、所聞當有異也、孔安國孔安國、云、獨

鯉趨而

過庭過庭、曰、學學、詩乎、對曰、未也、曰、不學詩

無以言也

鯉退而學詩、他日又獨立、鯉趨而過庭、曰、學

禮

乎、對曰、未也、不學禮無以立也、鯉退而學

禮、聞斯

二矣、陳陳、去去、退而喜曰、問問、得得、三、聞詩聞禮、又聞

君子之遠君子之遠、其子其子、文論詩第八、秋色者、落葉

晚聲微落

也287、小與微玉之字、一葉之意也、救云、言、鷄散二 雞

趨處レ作庭之意也、木葉者秋黃、又落、故曰

秋色、曰晚聲也、

早秋二 龜

209但喜暑去、隨三至、伏ニ去、不知秋送二 毛三 來

暑ニ熱一已過、雖喜、不知秋來、齡傾云也、三伏二 題三 下

二毛二 題一 下、有人云、人有三時、謂少時、盛時、老時也、

而白髮ニ生レ始レ程一、已老レ衰レ時至也、仍以秋ニ喻レ人一 老レ衰

之レ始也、文集五十七云、答蘓六

但喜暑〇二毛 來、更

無別計相寬慰、欲遣陽關勸一盃 巳上

20 槐ニ華一雨ニ潤レ新ニ秋一至レ地ニ也、桐ニ葉一變レ風ニ涼一 交ニ天一 早秋詩

身延文庫藏和漢朗詠註抄(翻刻)

槐秋始レ花ニ敷一故云新秋地也、又槐花ハ輕專露レ多

置物也、桐葉ハ變レ常ニ風一戰レ物也、就中秋彌風生者也

21 炎ニ景一上レ刺レ殘衣尚重ニ晚一涼ニ至一潛ニ到一 先ニ知レ 紀レ納言一 後作

上句炎景尚殘衣厚覺云也、次句秋氣成暮簞

冷覺云也、炎景也、重猶厚也、晚涼秋氣也、簞也 竹ニ筵一 毛詩注云、竹葦席曰簞也 文

風土記云、七月初七其夜、灑掃於庭、露レ施レ凡ニ也

酒、以祭河鼓、々々者牽牛也、或云、見天漢中有

變レ 白氣者、以此為微、見者拜而願乞壽、乞子

唯得

一、其一乞不兼二、求三年乃得、漬レ齊レ 記云、桂ニ陽一城ニ武一上レ 丁ニ余一有レ山ニ道一者、忽謂其弟曰、七月七日織女當

七夕

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

之星也、織女ハハサトル一切女人所作事也云々爾雅云、

有牽牛、一名河鼓、牽牛為夫、織女為婦、七月

七日得會合、博物志第八云、舊記云、天河與海

通、世有人居海渚者、年々八月有查來至、甚大、

往反不失其期、于時海人有奇志、乃立飛閣於查

上、多齎糧食、乘查而去、十餘月中猶見日月

(星辰)自後茫茫、忽亦不覺晝夜、至一

處、而

城郭狀如屋舍、甚美麗也、遙望室中多見織

婦、一丈夫牽牛、諸次飼之、丈夫驚問、何由至

此、海人具說來意、并問此何處、答曰、君還至

蜀、問嚴孟博君至平則可知之、竟不上岸、因便

隨還、如斯至家、後乃到蜀問君平、曰、其年其月

有客星、犯牽牛宿、許到天河時也、文風俗傳

云、七月七日牽牛織女度河、以結歡好、織

身延文庫藏和漢朗詠註抄(翻刻)

女星一

名仙娥、牽牛星一名天賈孟博、一名河鼓也、言天河與

地河相連、昔漢武帝時、年々八月有查來至、其木

甚大、往來不失其期、于時武帝使張騫至窮河

源、齎齎糧食、乘查、至牽牛國中、見織女上邊

河邊、洗紗、織女問云、君是何人、騫曰、余是

漢帝、使我窮河源、文有云、七月七日烏鵲填河、以度

織女、屋切韻云、星宿、說文云、萬物之文粹第八

云、七夕代牛女惜曉更應製卷、野美材、夫七

月七日靈匹佳期也、仰秋河之耿、

瞻白氣之夾、

守夜之人以此為應、登仙之語信而有徵、

詔諸臣曰、伉儷相親、天人惟一、易離難會、

今古所

傷、宜代牛女惜曉更、臣奉綸綬、輕敢獻芻蕘、

原、夫二星適遇、〇之聲、時復香莖散粉、絲綉

飄雲フク、宮人懷私之願ヲモテ似ニ面ヲ不同ニ、墨ノ客ノ雲ノ也ニ 〓

巧ク之ノ情ヲ

隨ニ分ニ應ニ異ニ、臣ハ有一ニ事ヲ、非ニ富ニ非ニ壽ニ、家ノ貪ニ親ニ老ニ、

庶カ不レ擇ス宮ノ雲ノ云フ爾ヲ已ム上ニ

25 露シ應ニ別ニ、髮ノ淚ノ多ク珠ニ、空ニ落ニ雲ニ是レ殘ニ粧ニ未レ成ニ 〓

皆ノ家ノ同ノ題ノ七ノ夕ノ詩ヲ

33 曉ハ露ハ是レ別ニ、淚ノ覺ニ云フ也ニ、次ニ句ニ雲ノ亂ニ散ニ、髻ノ未レ攢ニ上ニ、

似ト云フ也ニ、有ク云フ、下ニ句ニ、髻ノ未レ成ニ、內ニ郡ニ入リ道ニ云フ、雲ノ白ク氏ノ

六帖云、鮫ノ至ク人ノ至ク夢ニ出テ、水ノ中ニ、寄ル宿ル人ノ家ニ、臨ミ衣ニ泣キ而シテ 〓

出ル珠ヲ、

盈ニ盤ニ以テ與テ主ニ人ノ金ノ滿ニ、泉ノ客ノ懷ニ慨ニ、以テ泣キ珠ヲ、文ノ集ニ云フ、

頭ノ變ニ雲ノ髮ニ、文ノ救ニ云フ、言ハ、織ル女ノ露ヲ為シ別ニ淚ニ之ノ珠ヲ、以テ雲ノ

為シ總ニ髮ニ角ノ髮ト云フ也ニ、

26 風ハ從テ昨ニ夜ニ聲ノ彌ク彌ク、怨ニ露ニ及ニ、明ニ去リ朝ニ全ク淚ノ不レ禁ニ 〓

後江相公代牛女惜曉詩

風ハ從テ過リ夜ニ彌ク恨ニ成ニ、自レ此ニ以テ後ニ待テ相ノ會ニ、期ノ遠ニ故ニ、

34 云フ也ニ、次ニ句ニ露ヲ多ク置ル、別ニ淚ニ思フ云フ也ニ、

27 去キ衣ノ子ノ曳キ浪ノ霞ノ、應ニ濕ニ、行キ燭ノ懸ニ浸ニ、流ル月ノ欲ス 〓

消ス營ノ三ノ品ノ含メ媚ニ、（渡）渡ル河ノ詩ヲ

去キ衣ノ、脫キ懸ニ、夜ノ也ニ、霞ノ應ニ濕ニ、以テ霞ヲ為シ天ノ衣ト云フ、

事ノ也ニ、行キ燭ノ懸ニ、以テ月ノ欲ス、二ノ星ノ行キ合ニ事ノ夜ノ半ニ 〓

也ニ、而シテ以テ月ノ喻ニ炬ニ、七ノ日ノ夜ノ月ノ夜ノ半ノ後ニ入リ故ニ、行キ燭ノ欲ス消ス、窓ノ可ク

渡ル天ノ河ノ云フ也ニ、鵲ノ橋ノ、風ノ俗ノ記ニ云フ、七ノ月ノ七ノ日ノ鵲ノ毛ノ、豆ノ河ノ

為シ橋ト、與テ織ル女ノ遇フ、文ノ百ノ詠ノ注ニ曰ク、鵲ノ橋ノ似ク虹ト也ニ、又ク如ク 〓

鴈ノ齒ト也ニ、又ク似ク半ノ月ト也ニ、文ノ有ク所ニ云フ、七ノ月ノ七ノ日ノ鵲ノ一ノ雙ノ來テ、 〓

34 鶯ノ指ニ交ニ、

為シ漢ノ河ノ橋ト、渡ル二ノ星ト也ニ、云フ、有ク云フ、多ク鵲ノ飛ル列ニ並ニ羽ト為シ

橋ト也ニ、私ノ云フ、鵲ノ一ノ雙ノ為シ橋ト者ハ、其ノ鳥ノ以テ外ニ大ノ鳥ノ歟ト、如ク何ト

曾レ伽レ陀レ經ニ云フ、空ノ中ニ有リ五ノ百ノ大ノ河ト云フ、

28 詞ノ託テ微ニ雲ノ、波ノ全ク懸ニ、且レ遣テ心ノ斯レ金ノ片ノ、月ノ愈ク遠ニ 〓

欲ス為シ媒ト、待テ夜ノ詩ヲ、代ル牛ノ女ト

天ノ河ノ波ノ往ル來ス、付テ此ニ互ニ雖モ通ス消ス息ヲ、心ノ期ス七ノ月ノ七ノ日ト、

也ニ、而シテ以テ月ノ喻ニ炬ニ、七ノ日ノ夜ノ月ノ夜ノ半ノ後ニ入リ故ニ、行キ燭ノ欲ス消ス、窓ノ可ク

以為媒云也、片月七月七日、夜月也、カタワレ月也云々

万アマカハトヲキワタリニアラネトモ 人丸

古トシコトニアフトハスレトカタナハタノ 躬恒

ヌルヨノカスハスクチカカリケリ 貫文

内郡入道云、此歌、人間五十年下天一□夜文

相違也、尤不審也、但和歌、タウチアルマノ事ヨム

歟、私云、四天王、日月時年遠云事イハレタル

様ナレトモ、其、ウル事ノ、侍釋迦佛上切利天、一夏

九十日為母説送給事、天上九十日也、人間九

十日也、是時節不思議也、如然事、強以法性

相不可難之歟云々

357 秋興

222 林間 煖 酒 燥 紅 葉 舞 石 上 題 詩 全 轉 白

拂 綠 苔 全

往林中遊時、以紅葉盪酒、登石上宴時、拂苔

書詩云也、以赤青為對也、

223 楚 雲 思 森 霧 雲 水 冷 商 聲 清 轉 白

脆 管 絃 奏 秋 白

楚思者愁意也、有云、楚屈原楚辭曰、悲哉秋之

為、氣余文、是楚亡宮、轉思云事歟、私云、楚

思者、愁切

意也云々 森茫 遙也 森々 茫々 水長兒也、雲水水廣

(以下落丁)

翻字注

- (1丁オ) 1 「箱」字右傍に朱引きあり。 2 「才_ニヒ_ニタリ」の差声あり。 3 「香」字右傍に朱引、傍訓に「カ_ニヨ_ニ」の差声あり。(1丁ウ) 4 「タ_ニナ_ニハ_ニル_ニ」の圈点あり。(2丁オ) 5 「ソ_ニゴ_ニ」の圈点あり。 6 「開」字右傍に朱引あり。(4丁ウ) 7 欄眉に「汨玉云_ニ歴切_ニ」と書入れあり。(5丁ウ) 8 「ア_ニヤ_ニフ_ニメ_ニテ_ニ」の差声あり。(10丁ウ) 9 「ヌサマシ_ニウ_ニシテ_ニハ」の差声あり。(14丁ウ) 10 「ノ_ニハ_ニ」の差声あり。 11 「カ_ニ」の差声あり。(15丁オ) 12 「ウカ_ニ」とあり。 13 「ツ_ニマ_ニニ」の差声あり。(18丁ウ) 14 「フ_ニツ_ニラ_ニハ_ニ」の圈点あり。(19丁ウ) 15 「イ_ニツ_ニテ_ニ」の差声あり。(24丁オ) 16 「フ_ニク_ニメ_ニリ_ニ」の圈点あり。 17 欄眉に「懽歎」の書入れあり。(25丁オ) 18 「カ_ニナ_ニシ_ニフ_ニシ_ニニ_ニ」の差声あり。 19 「カナシフ_ニ」の差声あり。 20 「コ_ニウ_ニト」の圈点あり。(26丁オ) 21 「サ_ニメ_ニク_ニ」の差声あり。 22 「事」字傍訓に「_ニト_ニハ」_ニとあり、コトハと翻字した。(27丁オ) 23 「涼」字傍訓に「_ニヤ_ニウ_ニ」とあり、リヤウと判読した。(27丁ウ) 24 「フ_ニシ_ニル_ニ」の差声あり。 25 「鯉」字の附訓に「_ニル_ニ」がある。判読不能。文意により「_ニ」と翻字した。(29丁ウ) 26 「竹筴」の下に「_ニ世_ニ」を書き、_ニを消して次行に移し、双行割書となす。(33丁オ) 27 「_ニシ_ニ」の差声あり。(33丁ウ) 28 「キ_ニソ_ニウ_ニノ_ニヨ_ニ」の差声あり。(34丁オ) 29 「ウ_ニル_ニ」の差声あり。(34丁ウ) 30 「コト_ニハ_ニ」とあり。読点であらう。 31 「ナ_ニカ_ニタ_ニト_ニ」の差声あり。